現代座 通巻 495 号　年 4 回（3 月 1 日、6 月 1 日、9 月 1 日、12 月 1 日）発行　　1967 年 2 月 18 日 第三種郵便物認可

共生のきずなを求めて！

NPO 現代座

現代座レポート　No. 92

・川崎平右衛門フェスタ「農あるまちづくり」　（1）
・武蔵野は協同の大地だった　　木村　快　（2）
・朗読教室の活動　　長谷川葉月　（3）
・われらいずこより来たる⑫最初の試練　木村 快　（4-7）
・人形劇場「花かご」　・お知らせ　（8）
・会館日誌　会員入会・継続・寄付　（8）

2022 年 12 月 1 日　発行
（通巻 495 号）定価 100 円

NPO 現代座ホームページ　http://www.gendaiza.org/

特定非営利活動法人 ＮＰＯ現代座　　発行責任者：木村快
〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号　TEL 042-381-5165（代）　FAX042-381-6987

川崎平右衛門フェスタ 武蔵野市における 〈農あるまちづくり〉

２０１７年の府中市から始まった川崎平右衛門顕彰会は今年で6年目になりますが、今年から「川崎平右衛門フェスタ」という新しい名前になりました。

そこで11月3日（祝）に武蔵野芸能劇場小ホールで「川崎平右衛門フェスタin武蔵野市」のタイトルで開催されました。今年のテーマは「武蔵野市における農あるまちづくり」です。

まず東京学芸大学名誉教授・大石学先生によって「川崎平右衛門と武蔵野新田開発」の記念講演があり、次いでワーカーズコープ三多摩山梨事業本部長・扶蘇文重さんの講演「労働者協同組合法の施行と川崎平右衛門への想い」がありました。

そして顕彰会事務局長の蔦谷栄一さんから武蔵野市の農業についての説明があり、リレートークとして武蔵野市在住の5人の方がお話しくださいました。

◎武蔵野市で有機農業をやっている清水茂さん、◎ＮＰＯ武蔵野農業ふれあい村の齋藤瑞枝さん、◎武蔵野の森を育てる会の田中雅文さん、◎料理家の竹内ひろみさん、◎小農・森林ワーカーズの玉木信博さんです。

最後に武蔵野宣言が会場いっぱいの参加者の拍手で採択され、閉会しました。来年は西東京市を会場に行われます。

今回の行事のプレイベントとしては、9月25日に武蔵野市を歩く「都市農業の現場を歩くポールdeウォーク」が行われ、10月27日・30日には映画「医師中村哲の仕事・働くということ」の上映会が行われました。この映画は顕彰会の役員でもあるワーカーズコープが労働者協同組合法成立記念作品として制作したものです。

また10月10日には武蔵境駅前のスイング・ビル11階のレインボーサロンで、平右衛門の協同による新田開発を描いた現代座の合唱構成劇『武蔵野の歌が聞こえる』のＤＶＤ上映会が行われ、上映後にこの作品の脚本・演出を担当した木村快によるアフタートークが行われました。（2ページ参照）

東京学芸大学名誉教授・大石学先生

ワーカーズコープ 三多摩山梨事業本部長 扶蘇文重さん

川崎平右衛門顕彰会 事務局長 蔦谷栄一さん

清水茂さん

齋藤瑞枝さん

田中雅文さん

竹内ひろみさん

玉木信博さん

武蔵野は協同の大地だった

木村　快

２０２２年10月10日、武蔵野市のスイングビル・レインボーサロンで『武蔵野の歌が聞こえる』のＤＶＤ上映会が開かれました。観客は武蔵野市のワーカーズコープが運営するミニデイサービスの「きんもくせい」の方々が中心でした。上映後、作品の脚本演出を担当した木村快が解説することになりましたが、なにしろ堅い話なので、話す方も聞く方も、ひどく緊張していました。

私はこの隣の小金井市に57年前から住んでますが、この作品に取り組む２０１０年までは、川崎平右衛門のことは全く知りませんでした。江戸時代の明和の大火災で川崎家の資料が焼失したためか、あまり知られていません。

そこで平右衛門の活躍した武蔵野新田（しんでん）の話になるわけですが、…第八代将軍徳川吉宗の…えーとなんだっけ、私ももう76歳だからねえ。このとき進行役の木下美智子が寄ってきて「86歳ですよ」と注意します。

◆人が集まる劇場現象

「そうだ86歳だった」と苦笑すると。皆さんがワッと笑って、とても和やかな空気になりました。実は聞き手の皆さんも私と同年代の高齢者だったのです。

不思議ですねえ。こうやって集まって一つのことに集中してると、ちょっとした間違いでも和やかになることがあります。こうした状態を私は〈劇場現象〉と呼んでます。芝居を書くときはこうした現象もあることを考えながら書きます。さて、本題に戻りましょう。

◆江戸の食糧危機

第８代将軍、徳川吉宗が将軍になる前の江戸は元禄時代と呼ばれる大変華やかな時代で、江戸の人口は１００万人になっていました。そのための食料をどうするかが行政上の大きな問題でした。そこへ１７０４年から元禄地震、宝永大地震、そして富士山大噴火と大災害が続きます。特に火山灰が積もると米は栽培出来ません。武士の俸給もお米で支払われた時代ですから農業の危機は大問題です。

◆武蔵野新田の開発

そんな大変な時代、１７１６年に将軍となった吉宗は、享保の改革を開始します。武蔵野一帯はまだ全くの荒れ地でした。吉宗はこの武蔵野を何とかして食料基地に変えられないかと考え、１７２４年から「武蔵野新田」の開発に取り組みます。

幕府は関東一帯の次男三男を集めて新田の開発をすすめますが、役人たちは強制的に働かせるだけですから、百姓たちは逃げだし、全く進みません。そして10年目には新田は大凶作で餓死者が出ます。

◆川崎平右衛門

責任者の町奉行、大岡越前守忠相はこの事業は役人では無理だと考え、思い切って府中押立村の名主、平右衛門に声をかけます。押立村は多摩川水害の被害対策にあたる中心の村で、村人は常に力を合わせて対策にあたる習慣を持っていたからです。

平右衛門一家はもとは戦国時代の落ち武者で、世の中の変化に敏感で、水害に耐えられる堤防づくり、災害に耐えられる作物栽培に心がけていました。

◆共に生きるための方策「畑養い料」

寄せ集め百姓たちは、同じ村に住みながら隣同士の付き合いもなく、自分のことだけに閉じ込もりがちです。これをみんなで力を合わせる村に変えなくてはならないのです。平右衛門は村人が一緒に働くことによって豊かになることが実感できる「畑養い料」という制度を考案し、これが吉宗から直接承認されます。

◆協同で働く体験を

武蔵野は水に不自由する地域で、これも百姓が定着しにくい理由の一つでした。幕府から農民救済を命じられた平右衛門は村人を集め、これから村のための井戸を掘る。参加する者には食料を支給すると伝えます。働いた日は屈強の男には麦３升、土を運べる女には麦２升、子どもたちの面倒を見る年寄りには麦１升、幼児や赤ん坊は村の宝だから麦５合渡すと言います。最初は戸惑った村人も、一心同体となって働き始めます。

井戸に水が出はじめると、思わずみんな歓声をあげます。それからは昔から一緒に暮らしていたかのように互いに挨拶し、困っていれば助け合うようになります。荒れ地だった武蔵野の82ヵ村は「協同の村」へと姿を変えていきました。

◆協同が見直される時代

現代はまさに心をひとつにした「協同」が求められる時代です。今日の取り組みを主催されている川崎平右衛門顕彰会の皆さん、ワーカーズの皆さんの努力に改めて感謝します。

朗読教室の活動

長谷川葉月

この秋は、９月21日と22日に「誰でもできる朗読教室　２０２２年４月期生発表会」が、翌月の10月12日には、「誰でもできる朗読教室」の第１期クラス有志６人による朗読会「おかげさま会」が、現代座会館３階小ホールでありました。また、私自身は人生２度目の単独朗読公演を11月５日に吉祥寺シアターで催したりと、朗読活動が目白押しでした。

現代座で朗読教室を始めたのは２０１６年10月ですから、活動も７年目に入り、現在は第13期になります。これまで様々な作品を課題テキストとして取り上げてきたわけですが、ざっと数えて50作品あまり。それほど数は多くないですが、みんなで共有している文学作品が50タイトルあるというのは、大きな財産ですね。まだまだ、一緒に声に出したい作品がたくさんありますので、これからもコツコツと積み上げていきたいと思います。

周りを見れば、時代はますます文字を読むことから遠ざかっていて、最近では「耳から読書する」といったオーディオブックなどが流行っています。そう考えると朗読を学ぶ方たちは、このオーディオブックなどのように朗読を提供する側のほうですから、とても貴重な存在ですよね。目を使って文字を読み、さらにそれを声に出して、人の耳に作品をよりよく届けるために勉強する。そのために同じ作品を何度も繰り返し読まなくてはならないなんて、面倒なことばかり。効率を考えると時代に逆行している気もします。

ですが、この６年間で朗読を学ぶ人はどんどん増えてきています。学ぶきっかけはいろいろだと思いますが、とにかく本と親しくなってくださることは、私にとっては大変嬉しいことです。

作品を通して、豊かな言語表現に触れるというのも朗読の魅力の一つかもしれません。それまで自分の中に無かった新しい言葉を身につけていくことは、とても刺激的です。自分の心の支えになることもあるでしょう。《メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た『走れメロス』》とか、《元来人間というものは自己の力量に慢じて皆んな増長している。少し人間より強いものが出て来ていじめてやらなくてはこの先どこまで増長するか分からない『吾輩は猫である』》なんて洒落た言葉を、声に出して言ってみると、とても楽しいんです。まぁ、そんな難しいことを言わなくても、何より口を動かすことは体にいい。

ついでに、仲間と会っておしゃべりするのはストレス解消になるし、脳トレになる。いえ、案外これが、みなさんが習い続けている一番の理由かもしれません。

とにかく私は、これからもみなさんが楽しめる場を提供していこうと思います。

9/21（水）に朗読発表した「2022年4月期 水曜教室」
（後列）手塚修、環笑子、小野寺優子、本田典子、高嶋悦代
（前列）江花幸子、長谷川葉月（講師）、佐藤忍、尾花はるみ

9/22（木）に朗読発表した「2022 年 4 月期 木曜教室」
（後列）石川秀樹、古明地節子、早乙女裕子、田中ヒロミ、五味孝宏
（前列）今井治江、長谷川葉月（講師）、浜﨑小枝子、飯田恵理

誰でもできる朗読教室 第１期クラス有志朗読会「おかげさま会」でのリレー朗読。左から手塚修、石川秀樹、高嶋悦代。

第２回長谷川葉月「朗読会」で『黄金風景』（太宰治）を朗読。　写真／上田秀則

木村ノート◆われらいずこより来たる 第3部

⑫ 1969年 (1) 最初の試練 木村 快

前回までの記述

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ

①・レポート81号 1950年、新劇運動の分裂 中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。

②・レポート82号 1951年、新制作座の出発 ヴェリテ解散。真山、草村、槇村で新制作座。

③・レポート83号 1954年、庶民の新劇を標榜 労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。

【第2部】活動に参加した木村快の視点から

④・レポート84号 1959年(1)特別研究所開設

⑤・レポート85号 1959年(2)巡演活動の実態

⑥・レポート86号 1960年 安保闘争。平和集会では国際的要人からも注目が集まり、インドネシア共和国から招請される。

⑦・レポート87号 1963年(1) インドネシア訪問日本文化使節団 の公演記録

⑧・レポート88号 1963年(2) ユートピア新制作座文化センター設立。

⑨・レポート89号 1964年 ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。

⑩・レポート90号 1965年(1) 世の中から捨てられた若者たち

【第3部】生まれ変わって

⑪・レポート91号 1965年(2) 新しい生き方を探して

⑫ 1969年(1) 最初の試練

【なんとか滑り出したのだが】

◆活動の足跡

1966年暮れから始まった『雑草のうた』はなんとか滑り出し、歌と踊りの『青年アンサンブル』班、5人組小編成2班が1968年2月まで休みなく動き回った。主力の『雑草のうた』は1968年2月までに220回の公演を実現する。

◆どんな時代だったか

テレビはないし、新聞も読まなかったから、とにかく、その日その日を一生懸命生きていたということしか思い出せない。ただ労働組合の活動家たちの支援でスタートできた活動だから、労働運動の流れだけは気にしていたが、あまりよく理解できていなかった。

◆職業劇団らしい給与制にはもう一息

争議団69名からスタートしたときは入団退団のきまりがなく、心を共にしたい者だけが自由に参加する申し合わせだった。若かったせいか、幸い退団者はなく、1969年新年には劇団員が88名になっていた。

活動体制は執行部のもとに制作部、芝居班、歌と踊り班、小編成5人組、本部事務局と体系化した。

食事と医療は劇団の負担、個人への現金支給は月3千円のみという争議団の仕組みがまだ続いていたが、活動は少しずつ拡大しているので、給与制を実現するのはもう一息というところだった。

◆創作劇第2作に取りかかる

そこで1967年のうちに次期作品として『おふくろさんこんにちわ』の創作に取りかかった。争議団活動の経験で、中小企業の未組織労働者を描いた『雑草のうた』から、次は家族の理解を得るためのドラマを目指した。

【第一次稽古場の建設】

◆稽古場が欲しい

公演活動が安定してくると、稽古場が欲しくなる。歌と踊りの訓練にはレッスン場が必要だし、芝居の稽古には外界から遮断された舞台空間が必要である。踊りのレッスンは小金井公園の広場で何とかなったが、芝居の稽古はやはり難しい。

1967年春、小金井市の準工業地域に85坪の土地が売りに出ていたので、あと先を考えずに購入した。あたり一体は菜の花畑だったが、まず第一次稽古場として、幅10㍍、奥行き9㍍の稽古場と、食堂、事務局を備えた本部を建てたかった。それには1500万円の資金が必要なので、支援者に呼びかけてとりあえず500万円借入できた。まだ劇団経営の経験が浅いため、何とかなるだろうと甘く考えて建設に踏み切ったのだった。

左側2階建て（1階）食堂兼会議室、（2階）資料室・事務局。右側の平屋は10㍍間口の舞台のある稽古場。

1967年12月の上棟式には支援者に集まって貰い、感謝の歌をう

おふくろさん・こんにちわ

木村快・脚本演出
岡田京子・音楽

街の鉄工所で働く自称ドリルの良平、スパナのトメ、ハンマーのクロは「3人合わせて一人前」と馬鹿にされているが、ある日、街の電機工場で働く女性3人組から組合の文化祭に来ないかと声をかけられる。組合活動には全く無関心な3人は女の子たちとはなかなか話が噛まない。口から出任せのホラ話で煙に巻いたものの、職場に戻ると「俺たちは電機工場の女の子たちから文化祭に招待されている」と自慢したため、上司から危険視される。中小企業の工場では「幻の労働組合」の噂が広まっていたため、経営者が戦々恐々としていたのだ。

そんな時、女手一つで子供たちを育ててきた良平の母マサが勤めていた職場を定年退職し、息子と一緒に暮らそうと訪ねて来た。

職場の上司に様子を訪ねると、どうもよからぬ仲間とつきあっている様子だという。母親はなんとか息子を立ち直らせようと奔走するが、母親の努力はすべて裏目に出て、いっそう息子の反発を買ってしまう。

望みを絶たれた母親が、あらためて息子は自分の老後のために育てたわけではないことを自覚したとき、息子もまた母親のかなしみを理解する。

中小企業で働く青年たちの、青春群像を描いた作品。

（１９６８年～１９６９年）
全国２５６公演

たい歓声を上げた。来賓の祝辞もこの調子なら大劇団に成長すると言ってくれた。

だが、実はこの建設が始まってからまもなく、木村は過労で体調を崩していた。とにかく早く台本を書き上げ、新しい稽古場で稽古を始めたかった。

【船頭が倒れる】

◆木村、メニエル病で倒れる

１９６８年が明けて、みんなで協力して新しい稽古場で『おふくろさん・こんにちわ』の稽古を仕上げた。東京での幕開け公演の評判は良かった。

だが、木村は激しい耳鳴りで寝込むようになり、ついに都心の病院に3ヶ月間入院することになった。診断の結果はメニエル症候群と呼ばれる原因不明の三半規管の障害で、治療法が確立されていないのだという。三半規管は身体の平衡感覚をコントロールする機能で、右耳は激しい耳鳴りで聴力がゼロ。右手は震えて字が書けない。そして時おり目まいを起こす。ただ、内臓には問題がなく、食事もできるし、読書もできた。

だが担当医師からは冗談半分で「現在の仕事を辞めて、山奥でフナ釣りでもしながら養生するしかないでしょう」と言われる。まだ事務機能も確立していなかったから、経営問題についてはすべて木村が担っていた。いわば船の船頭が倒れたわけだ。

◆執行部交代

やむなく総会で木村抜きの新執行部を編成し、劇団の代表も大鳥龍男に交代してもらった。執行部の変更は多少現場に混乱が出ることも覚悟した。

ただ病状については、支援者たちに不安を与えないように、「木村は体調を崩したので、しばらく静養する」という程度にとどめ、外部には知らせないことにした。

（★この項については次号で紹介する）

【危機到来】

◆公演班から救済を求めてくる

退院後、静岡の制作事務所の当番をしながら静養していた。そして静養から本部に戻ってくると、事務所では騒ぎが起こっていた。九州から公演班収入の送金がなく、稽古場建設負債の返済ができないと言う。更に九州の責任者河野光枝からは「小倉で宿の支払が出来ず立ち往生している。なんとかして至急金を送ってくれ」と言って来る。やはり現場では混乱が起きているらしい。

支援者と相談して当面の対策を取った上で、とっさの対策は木村が飛ぶしかないだろうということで、新たに３００万円ほど借入して、九州へ飛ぶことになった。耳鳴りも右手の震えも治まらないが、もう静養どころではなかった。まだ高速道路が貫通していない時代だったが、一人で中古車を運転しながら九州小倉の宿へ向かった。

◆組織に頼ることの限界

責任者の河野光枝は新制作座以来の準備活動のベテランであり、争議以後は制作部門の中心だった。めったに弱音を吐かない人だったが、会ってみるとさすがに消耗していた。

この時の計画では、山口県から福岡北九州へ入り、宮崎県までの3県で50公演を予定していた。ところが、まず山口県では9カ所の公演を予定していたのに、県の労働組合から県独自の取組みがあるので、公演しないでくれと申し渡され、やっと小さな労組で5公演だ

け取り組んでくれることになった。そうした苦境に追い込まれたせいか、経験のない初心者から肺炎で入院する者が出たり、無断で実家に帰ってしまった者が出たりで、みんなやる気を失っていた。

北九州も事情は同じで、労働組合ではすでに『うたごえ祭典』が最重要課題と決められており、それが終わると次はわらび座公演の開催になっている。どうして事前にそうした事情をつかまなかったのかと思うが、それ以前のコースとして名古屋地区での公演も計画されていたので調整できなかったのだろう。しかし、まばらな形で十数公演は決まっているので、全面的に変更することはできず、組合関係のアトラクションとして上演させて貰っている。しかしアトラクションではわずかな謝礼しか貰えず、上演経費はすべて手持ち資金から支払わねばならず、ますます赤字が増える。

◆ある労組のアトラクションで

実態を知るためにある労組集会でのアトラクションに出かけてみた。舞台で行われている労組の行事が終わり、30分の休憩の間に幕を閉め、舞台のセットを組む。だが幕を開ける前に客はどんどん帰っていく。わずか数十人の客がばらばらに座っているだけで、舞台への反応も起きない。これでは俳優も萎えてしまう。

【新しい環境を探してみよう】

◆南九州へ行こう

労働組合には労働組合側の事情がある。問題はわれわれが労働運動の実態を知らないまま頼っていたのだ。労働組合の影響の少ない地方だったらどんな活動が出来るのだろうと考えた。河野君と話し合ってみて、福岡の次に予定していた宮崎県を鹿児島県とくっつけて、新しく南九州コースにしようということになった。同行できる制作部員はたった9名だった。

◆大分の造形劇場を訪ねる

南九州の文化状況を知るために、まず大分へ行ってみることにした。大分には新制作座時代の先輩、野呂祐吉さんが運営する自立劇団「造形劇場」がある。彼に電話すると、「ぜひ休養を兼ねて若者たちを連れてこい」と言ってくれる。野呂さんは母親の農園をつがなければならない事情があって帰郷し、近隣の若者たちを集めて農園で働きながらの演劇活動をすすめていた。こういうやり方もあるんだなあと思った。

造形劇場には広い稽古場があり、ここでしばらく滞在させて貰って、日中は農作業を手伝った。

みんな農作業は未体験だったから造形劇場の若者から教わりながら働いた。そして造形劇場の活動体験を身近に聞くことによって、農村文化の特徴、農村の現状についていろいろ知ることが出来た。

◆劇場は新しい村祭りだ！

夜、造形劇場の若者と一緒に劇場論の講座を開き、木村が「演劇は観るものじゃない。村の心を再生するため、みんなで集まって心の共感を生み出す祭りのようなものだ」としめくくって、思わず「そうだ。農村の若者たちと一緒に新しい村祭りを起こせばいい」と口走ってしまった。するとみんなも「そうですね。やりましょうよ」と声を上げた。

【まず農村の文化状況を知ろう】

◆桜島の灰を浴びながら

労働組合を頼る活動から、一転して農村部の青年たちの中に入っていくことになった。

4月、鹿児島県南部の錦江湾に面した町、加治木町の畑の中にポツンとたっている古民家を借りて、南九州事務所にした（上段の写真）。対岸の桜島が噴火すると、灰が積もるので、安く借りられた。実際何度か噴火があり、洗濯物に灰が積もった。

◆とにかく調査してみよう

鹿児島県は小さな村が密集している県だった。各村の教育委員会で村の文化状況を調べ、「この村で演劇を上演してみたい」と言うと、どの村でも「そんなことは不可能だ」と全く相手にされなかった。

◆日下部ひで子の報告から

小さな村の役場で何度か弁当を食べさせて貰った。

〈加治木事務所〉
9人でスタート
・松本　豊
裏方歴3年
・藤原房枝
研究生2年
宮沢順子
研究生2年
・日下部ひで子
劇団歴5年
藤田恵美子
劇団歴4年
・木村　快
劇団歴9年
下条倬弘
裏方歴6年
・河野光枝
制作歴8年
・池田まち子
俳優歴9年
★経歴は新制作座から

すると若い女性職員がお茶を入れてくれるようになった。彼女、実は青年団員だった。村の若者は福岡・大阪・名古屋へ出稼ぎへ行ってあまり残っていないという。青年団活動もほとんど行われていないらしい。それでも青年活動をなんとかしたいと言っているガソリンスタンドの青年がいると紹介してくれた。それが県下の青年団活動の実態を知る糸口になった。

【改めて公演費用について考える】

◆祭りのための費用マニュアル

貧しいとは言え80人以上の団員が生活しているのに、すべて目に見える現金だけで対処していたので、経理問題については全く無知だった。一応1公演12万5千円ということにしてあったが、とにかく入場料収入から主催経費を差し引いた額だけを貰っていた。

しかし村人に呼びかけて祭りを企画するのだから、最低限の知識は必要だ。そこで、みんなにわかりやすい基礎的なマニュアルを作ってみようと考えた。

鹿児島市の天文館通りを歩いていたら、陳列に計算尺を置いている店があった。木村が子どもの頃、父が建築設計事務所を経営していたため、懐かしさで見入っていたが、これを使って公演費用の分析をしてみようと考えて購入した。まだ電卓が普及する前のことだったが、大まかな概算で分析することが出来た。

◆青年たちに望む活動

まず村人に村祭りの話を聞いて歩いてほしい。反対意見でもかまわないから、特に年配者の意見を集める。祭りの費用を検討する。近くの村の実態と比較する。

【劇団と連帯して新しい祭りを】

◆連帯と協同

青年団の集まりがあると聞けば出かけて、歌と踊りを披露させて貰う。青年たちが歓声を上げるとマニュアルを配り、芝居を軸にして新しい祭りを作らないかと呼びかけた。青年たちはまさかそんなことができるとも思わず、面白がって自分の村の公演費用を分析し、目標を立てるようになった。

祭りを開くことが目的だから、小さな村で標準規模の達成が難しいときは当然劇団が協力するし、青年団同士で助け合おうということにした。

この動きは県下の青年たちの間に広まっていった。声がかかれば木村がどこへでも出かけて行って、どんな村祭りがあったかを聞きだし、劇場は村祭りから始まったのだと話した。

◆鹿児島公演が始まった

5月中に宮崎県の公演を終わり、6月、鹿児島県公演は小さなS村の小学校体育館で幕を開けた。老人たちがぞろぞろやってきて、幕が開く前から楽しそうに話し合っている。労働組合の青年を対象につくった作品なのに、若者たちを出稼ぎで送り出しているためか、まず何よりもオロオロする母親に共感し、情けない若者三人組に「頑張れ！」と野次が飛んだ。締めくくりの踊りは万雷の拍手だった。帰途についた村人が主催の青年たちに「ありがとう、久しぶりで楽しかった」と感謝して行く。誰もが祭りを望んでいたのだ。

◆劇場を目指す若者たちの結集

そこで青年団同士の交流を兼ね、思い切って鹿児島市公会堂で『おふくろさん・こんにちわ』を劇団主催で上演した。有名な催しでも８００人程度しか集まらないというのに、県内の青年たちが千人以上集まった。

これで弾みが付き、宮崎・熊本・鹿児島の40公演は全て成功した。

宮崎県　９公演＋高校3公演
熊本県　４公演
鹿児島県　21公演＋高校3公演

北九州では大赤字だったが、南九州に入ってからの収入は４７０万円、今まで見たこともない収入だった。

これで負債を返済する目途もついたし、新しい劇場づくり活動の展望が開けてきた。

【◆以下次号】

◎一応小編成の経験があるから、若者たちの集まりで簡単な踊りと合唱。そして愉快に談笑して友達になる。

◎１９６９年7月4日、鹿児島市文化センターに集まってくれた青年たち。集まった彼らが驚いていた。

人形劇場「花かご」

10月22日（土）、3F小ホールでピアニスト秋山ちづるさんのライブ「ちづる＋Oneだふる」に人形劇場「花かご」がゲスト出演しました。実はこの企画は8月に予定されていたのですが、コロナの広がりで、たくさんの人が集まって盛り上がるのは危険だと判断し、急遽10月に延期になったのです。

せっかく久しぶりに現代座で公演するのだからと、翌23日（日）には「花かご」だけで上演することになりました。

「花かご」は1983年に現代座の母親劇団員が発足させた人形劇のグループです。10年ほど前に現代座から独立しましたが、ずっと各地の保育園や幼稚園・こども園等での公演を続けています。

今回は現代座時代からの会員や支持者も「花かご」公演を楽しみに集まって、交流会にもなり、大人もこどももいっしょに楽しいひとときを過ごしました。

お知らせ

現代座公演を YouTube で見られます

『ブリンギン・ホテルにて』
URL　https://youtu.be/ndx5p9ucmpI
『風は故郷へ』
URL　https://www.youtube.com/watch?v=mJESquAU_zY
◆ DVD 郵送もできますのでご希望の方はご連絡ください。
TEL 042-381-5165　　FAX 042-381-6987

現代座会館2022年9月～11月　活動日誌

9月23日　NPO現代座会議
「現代座レポート91号」発送作業
9月29日　岡田京子さん来訪
10月10日　「武蔵野の歌が聞こえる」DVD上映会
木村快アフタートーク
10月23日　NPO現代座会議
11月3日　川崎平右衛門フェスタin武蔵野市
第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】
9月12～16日　希望舞台「釈迦内柩唄」稽古
10月19～11月12日　希望舞台
「居酒屋夢子1969」稽古
11月13～27日　スタジオ・ポラーノ
「銀河鉄道の夜」稽古・公演
30～12月4日　砂の上の企画「パンの耳」公演

【三階小ホール】
9月2～4日「劇団獣申」公演
18日　津田コンサート「湯山昭はお好き?」
21・22日　朗読教室発表会
10月12日　武蔵野朗読会「おかげさま会」
22日　ちづる＋Oneだふる公演
23日　人形劇場「花かご」公演
11月12・13・15日　NPO「千夜一夜座」稽古
隔水曜・木曜日　朗読教室
毎火曜・木曜日　ヨガ教室

【二階サロン】
10月15日　緑町第2町会役員会
11・18日　「希望舞台」稽古
毎水曜日　熟年パソコンサークル
隔木曜日　ipad 熟年講座

ＮＰＯ現代座の会員になってください

●年間４回発行の活動レポートをお送りします。
●会員による企画行事をお知らせします。
●お申し出があれば、上演舞台の録画ＤＶＤをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）
一般会員　　3,000 円
協賛会員　　10,000 円（１口以上）
郵便振替口座番号　00110-7-703151　ＮＰＯ現代座